

日本建築の”擬”術 —中世和様仏堂における構造と化粧のズレと現代的な建築デザインへの応用—

The “Fake” Designs of Japanese Architecture - The contradiction between the structure and the ornaments in medieval temples and their possibilities in contemporary architectural design -

東京都市大学 建築都市デザイン学部 建築学科 教授 福島 加津也

1.研究の背景と目的

本研究は、日本の伝統的な木造建築（以下、古建築）の中で、特に中世（12~15世紀）に多く建設された和様の寺院仏堂を中心に、構造体が空間表現においてどのように扱われているかを分析することで、構造と化粧の複雑な関係性を考察し、現代の建築デザインでの発展性を示すことを目的としている。

中世以降の仏堂は、天井仕上げの登場により小屋荷重を負担する梁を室内に見せるか天井裏に隠すかを、意匠的な判断において選択できるようになる。すると、小屋荷重を天井裏の梁で処理しながらも、構造的には不要な偽の梁を室内に見せる興味深い事例が出現する。このズレは近代以降に不純であるとされて、建築家に参照されることはなかった。しかし、私たちはここに建築デザインの多義的な奥深さがあると考えている。

そのような表現手法を、「まがいもの」を意味する「擬」という字を用い^{ぎじゆつ}擬術と名付けて肯定的に評価し、古建築に対する新たな認識の構築を試みる。それは、これまでの大仏様の構造美や桂離宮の即物美とは異なる、見過ごされてきた古建築の美的価値である。

2.研究の内容と方法

2-1.調査事例の選定

構造か化粧かという二元論では語りきれない擬術の全体像を記述するには、ひとつの事例を深く調査するだけでなく、これまで建築史学が蓄積してきた調査報告書等の実証的な研究成果に基づき、複数の事例による比較検討を通して寺社建築をつくった工匠たちの設計意図を類推する必要がある。こうした研究手法によって、古建築を近現代建築と同様に自分たちと直接関係のある参照対象とすることができる。

和様の仏堂が多く建設された中世は、12世紀末に大仏様という徹底した構造表現様式が中国大陸から輸入されたところからはじまる。その頃の建築をみると、それまでに確立しつつあった藤原風の繊細な空間表現を目指していた工匠たちが、大仏様の衝撃に戸惑いながらも、それをいかに受容して空間表現に利用したかがよく表れている。中世が日本建築の歴史上において、構造と化粧の関係性が最もダイナミックに変動した時代といえるだろう。

この時代に試みられた建築表現は、構造体の見せ方や隠し方といった単純なものだけではない。荷重を支持しない梁や組物をあえて配置したり、梁によって省略できるはずの柱を残すなど、空間の格式や方向性を示すための記号としてデザインされている事例が多くあり、高度な意匠的判断が含まれている。このような表現手法は、古建築の構造に対する理解が進んだ現代だからこそ再考できる問題である。

調査事例の選定にあたっては、中世以降の古建築の修理工事報告書などの図面を読み込む

ことから始めた。とくに断面図は、空間に現れている部材が構造的に機能しているかどうか、天井裏の構造とあわせて判断することができる。

本研究では、天井が発生する以前の時代には構造部材として機能していたものが、その後も形を変えずに空間表現として用いられている事例に着目した。そのような視点で文献調査を続けると、空間表現としての部材の取り扱い方には大きく分けてふたつの傾向があることが分かった。

ひとつは柱や梁のように面的部材を伴わず空間に独立して現わされる軸組的なもの。もうひとつは垂木や組物のように壁や野地板などの面的部材に取り付けられる表層的なものである。それぞれ軸組的事例を8件、表層的事例を5件の計13件を選定した。なお、擬術が古建築全般にみられる現象であることを示すために、門や塔、民家も対象とした。

また、本研究は日本の古建築のデザインをいかに現代に応用できるかを検討するため、現代の建築家が古建築をどのように参照したかを見直す必要がある。そこで、後述する4名の建築家とその作品に着目した。

2-2. 現地調査の実施

調査の対象となった事例は日本各地に分布しているため、現地調査は6回に分けて行った。それぞれの時期と地域は次のとおりであり、計18日間で31事例の調査を行うことができた。

- | | |
|--|--------------------------------|
| ①2022年12月14日~16日
千葉県, 埼玉県, 山梨県, 静岡県, 神奈川県 | ④2023年8月1日~3日
奈良県 |
| ②2023年2月20日~22日
広島県, 愛媛県 | ⑤2023年9月4日~7日
大阪府, 兵庫県, 鳥取県 |
| ③2023年4月23日~25日
岐阜県, 福井県, 京都府, 滋賀県 | ⑥2024年2月29日~3月1日
岩手県 |

現地調査の主な内容は、写真撮影と管理者（ご住職など）へのインタビューである。事前に各事例について文献を読み込み、実物で確認すべきところを明確にしてから現地調査に臨んだ。

3. 研究の成果と考察

古建築のデザインの分析にあたっては、新築を設計するように構造と非構造を明快に分けて考えることができない。そのため、次節以降の記述は推定に基づく解釈であり、実証的とは言えないかもしれない。しかし本研究は個々の事例における工匠の意図を類推し、古建築を現代の建築家にとって新たな着想を与える参照の対象とすることが目的であるため、このような手法をとっている。

また、次節以降の記述に併置している図面は各事例の修理工事報告書に収録されている断面図を加工したものである。本研究で着目している部材を赤で着色し、さらに空間体験に現れない天井裏の部分はグレーの網掛けで表現した。これにより、垂木や梁などの部材が天井の上下で共存している事例において、空間体験に現れる部材と隠される部材を明快に判別することができるようになる。

3-1.軸組的な擬術

3-1-1.太山寺本堂（1285,兵庫） 図1

二手先の組物は外部の軒を支えるために発達した技法にもかかわらず、内部に用いられている。内陣では、梁が室内に現わされているが、小屋荷重は天井裏の梁が受け持っているため、構造的には不要な部材である。ひとつの建築から天井を飾るふたつの手法が確認できる。

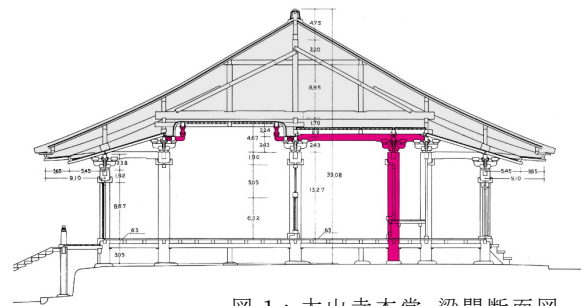


図1：太山寺本堂 梁間断面図

3-1-2.長弓寺本堂（1279,奈良） 図2

中世の仏堂において外陣に奥行3間の梁を用いるものは他に例がなく、それを支えるように下から入る柱が特徴的だ。この柱は建設後に補強で入れられたという見解もあるが、具体的な根拠は見つかっていない。構造的に無理が分かっているのであれば初めから2間の梁で構成すれば良いはずなので、当初材とも推察できる。取って付けたようなこの柱は、はじめから計画された構造材なのに、補強のように見せていると解釈できる。

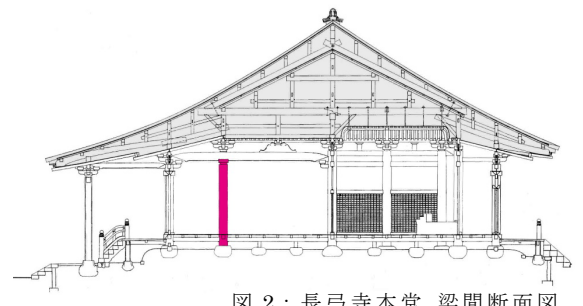


図2：長弓寺本堂 梁間断面図

3-1-3.浄土寺浄土堂（1192,兵庫） 図3

本事例は、古建築における合理的な構造デザインのお手本とされてきた。しかし注意深く観察してみると、通し柱に挿さる3段の梁のうち、下段と中段には束が立つが上段にはないことに気づく。構造的に不純な部材が紛れているのは、幾何学的な整合性を尊重した結果なのだろう。

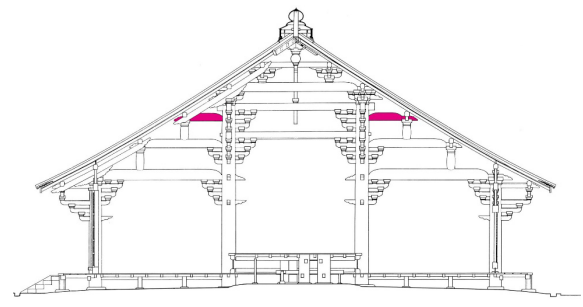


図3：浄土寺浄土堂 縦断面図

3-1-4.興隆寺本堂（1375,愛媛） 図4

内陣には3間に渡って梁がかけられるが、天井裏にも同等の梁があるため、天井下の梁は小屋荷重を負担していない。しかし近世になると、接合部の腐食によって補強が必要となり、自重のみを支える柱を追加することになった。化粧材が化粧材を支えている珍しい事例である。

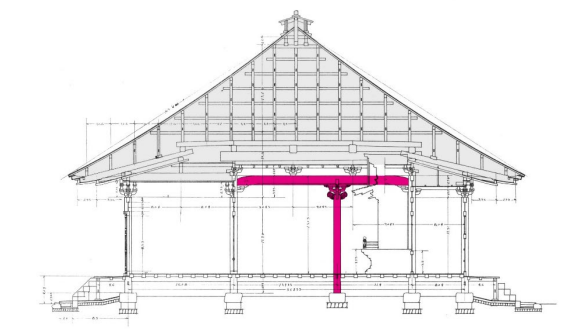


図4：興隆寺本堂 梁間断面図

3-1-5.明王院本堂（1321,広島） 図5

中世仏堂の外陣では、一室のなかで天井仕上げを前後で切り替えることが多く、手前を勾配天井に、奥を水平天井とすることが一般的である。この事例では水平天井となるところを曲面にして、それに沿うように湾曲した垂木が配置され、さらにミニチュアの虹梁が架けられる。これらふたつの部材は、古来は構造材であったものが、デフォルメされている。

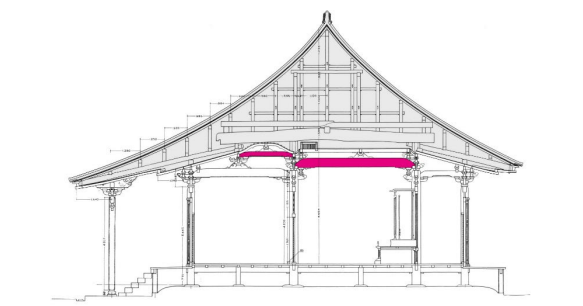


図5：興隆寺本堂 梁間断面図

3-1-6.金剛寺金堂（1320,大阪） 図 6

中世の仏堂において構造を表現する系統の最終到達点を示す事例である。外陣と内陣ともに梁によって柱を抜き、その梁を室内に現している。興味深いのは、後世の改修の際に、この梁の成が見かけ上だけ増されていることである。断面では凹型になり、かさ増し部分は単なる板となっている。梁が空間演出においていかに重要視されていたのかがよく分かる。

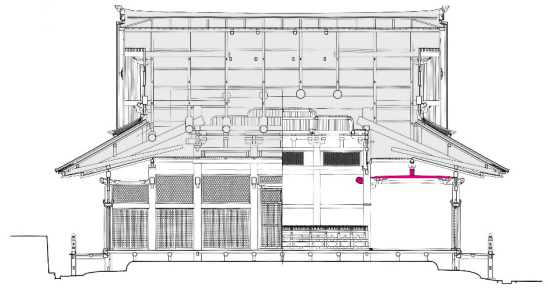


図 6：金剛寺金堂 桁行断面図

3-1-7.渡部家住宅（1809,愛媛） 図 7

幕末期に建てられた豪農の住宅。土間空間の上部に縦横に組まれた太い梁が見どころだが、座敷側の天井裏の梁組より一段多いため、最下段は構造的には不要だと思われる。仏堂の場合、見せる梁と隠す梁を天井で分けるのが普通であるが、農家の場合には荒々しい小屋構造をそのまま見せることが多い。しかし、渡部家では真の梁と擬の梁を同時に見せているところが興味深い。

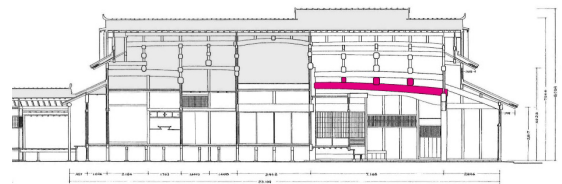


図 7：渡部家住宅主屋 桁行断面図

3-1-8.江川家住宅（1660,静岡） 図 8

土間から屋根架構の軸組を見上げた際の写真がよく知られているが、現代の構造的な感覚からすると、この貫の数は過剰にも思えてくる。また、構造的に有効な筋交いが打たれていないことから、工匠の美学的判断が十分に含まれていたことが推察できる。

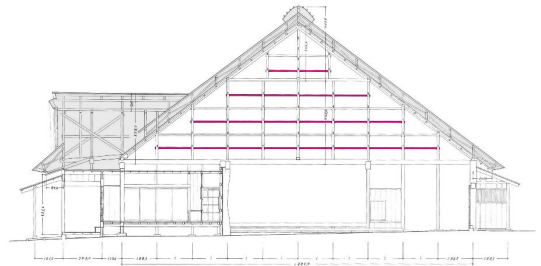


図 8：江川家住宅主屋 横断面図

3-2.表層的な擬術

3-2-1.長寿寺本堂（鎌倉前期,滋賀） 図 9

柱の上部にあり外部に突出している台形の部材は、梁の端部に特有の形状であるにも関わらず、実際には内部の梁の高さとズレている。また、その梁の反対側は内部の柱に突き刺さるが、半割の大斗があてがわれることで、あたかも柱の上に乗っているように見せかけている。

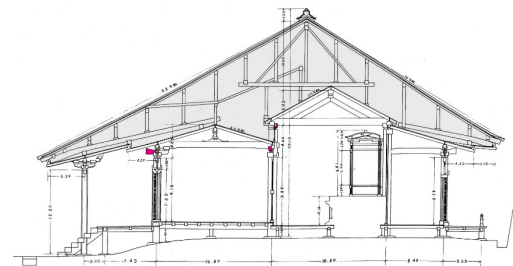


図 9：長寿寺本堂 梁間断面図

3-2-2.教王護国寺蓮華門（鎌倉前期,京都） 図 10

外観の妻面で見えるように見せている部材は、半割となって壁の反対側の内部では肘木となっている。内部では梁組がそのまま現されるのではなく天井が張られている。外観は梁組で力強さを、内部は格子天井で繊細さを表現したのである。

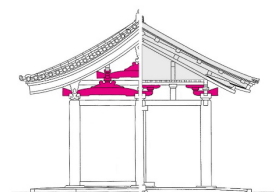


図 10：教王護国寺蓮華門
北側立面図（左） 梁間断面図（右）

3-2-3.大善寺本堂（1286,山梨） 図 11

化粧垂木の高さを外部と内部で変えているが、空間体験としてはひとつの部材に感じる。外部に二手先組物を使用すると垂木の架かる位置が高くなるが、内部ではその高さを抑えるために軒先とは別に低い位置に垂木を架けている。

3-2-4.本興寺開山堂（1617,兵庫） 図 12

内部の勾配天井の仕上げに垂木を採用せず、板に絵を描いた珍しい事例。一方、外部の軒裏には垂木を取り付ける。10世紀以降の天井仕上げには、構造の発達によって不要になった垂木が化粧として採用され続けたが、本事例では構造の発展により意匠的な選択を優先させることが強く意識されている。

3-2-5.普門寺三重塔（1809年岩手） 写真 1

三層すべてで軒裏のデザインを変えている。特に二層目は板が彫刻されてレリーフのようにになっているのがめずらしく、軒裏に化粧垂木を配置するセオリーが破られている。これによって一層目と三層目の軒裏も構造材ではないことが暗に示されている。

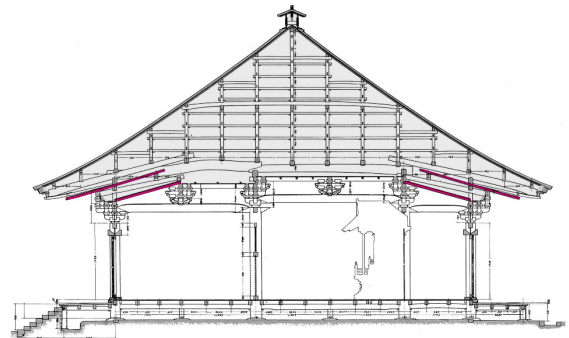


図 11：大善寺本堂 梁間断面図

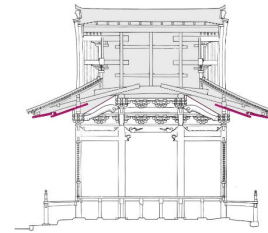


図 12：本興寺開山堂 梁間断面図



写真 1：普門寺三重塔

3-4.現代建築

日本の伝統をコンセプトにした建築家を4名取り上げる。まずは、それぞれの言説が収録された文献を調査することで古建築に対するスタンスを確認した。その方向性は、古建築の擬術と同じようにふたつに分けられる。一方は、軸組的に和を表現した菊竹清訓と清家清。もう一方は、表層的に和を表現した村野藤吾と吉田五十八である。

3-4-1. 東光園（1964,鳥取） 写真 2

組み柱と貫の構成は、大鳥居や懸け造の縁下を想起させる。貫の高さは外観のプロポーションから慎重に選択されており、4階では正面側と背面側で異なる。正面から見上げた時に4階の天井が美しく見えるように貫の位置を一段下げたようである。構造部材の構成を視覚的な補正によって整える手法は、浄土寺浄土堂にも見られた。

3-4-2. 島澤先生の家（1962,東京） 写真 3

内部に象徴的な大黒柱を据えるが、その位置は外観を特徴づけている棟持柱の芯とは一致してい



写真 2：東光園



写真 3：島澤先生の家

ない。このような構造体は力学的な合理ではないかもしれないが、生活の機能とは上手く整合しているのだろう。現在の住まい手が「この柱があると、構造をしっかりと考えて設計されたように思えて安心感がある」と言っていたのが印象に残っている。力学的に不純な柱で空間を印象づけるのは、興隆寺本堂の内陣のようでもある。

3-4-3. 旧大阪歌舞伎座（1958,大阪）写真4

村野藤吾による桃山時代風のファサードが特徴的である。現状はホテルに改修されたが、ファサードに関しては詳細に再現されている。唐破風は日本の伝統を連想させるが、水平に連続させる表現は古建築には無く、単なる模倣ではない力強さがある。伝統表現のセオリーを意図的に破る手法は、普門寺三重塔にも見られた。



写真4：旧大阪歌舞伎座

3-4-4. 吉屋信子邸（1962,神奈川）写真5

吉田五十八による民家のリノベーションという珍しい事例である。改造によって天井を高くしたため現しになった天井桁をあえて柱からはみ出る位置で切り残したり、梁を壁の片面で見せ、反対側では隠すなどの操作がみられた。絨毯敷きの居間には構造部材の要素を積極的に露出し、畳敷きの和室では隠されていた。壁などの境界面の前後で空間の性格に合わせて表現を変えるのは、教王護国寺蓮華門にも見られた手法である。



写真5：吉屋信子邸

4.まとめ

日本建築史における中世とは、大陸からもたらされた大仏様という技術革新から始まる。構造は合理化された一方で、すでに国風化していた日本人の感性との間にはズレがあった。

海外の技術や文化の輸入によるインパクトとその後の国内での表現の模索は、これまで日本の建築界が度々経験していることであり、古くは奈良時代の法隆寺建設もそのひとつだ。

あらゆる合理化が求められる現代は、近代のモダニズム建築がもたらした影響下にあると言っていだろう。そのような時代に建築デザインを考えると、中世以降の古建築が挑戦してきた先述の表現の数々は、多くの示唆を与えてくれる。幾何学的に美しいことと、構造的な真実にはズレがあることは、そのひとつである。

このように、本研究では、古建築の表現の個々を観察し記述することで、古建築と現代を連続して読み解くための新たな視点を提示することができた。

5.発表論文等の成果

本研究は、これまで建築家たちにとって空間表現の意図が捉えづらい存在であった中世以降の古建築について、歴史研究者以外にも開かれた議論の枠組みを提供することを目的としている。研究期間中に成果を発表することはできなかったが、今後も同テーマで継続的に研究に取り組み、多くの人が手に取りやすいように書籍として発表したいと考えている。